第６回丹波新地域ビジョン検討委員会　記録

１　**開催日時**　　令和４年２月１７日（木）　１８：００～１９：３０

２　**場　　所**　　柏原総合庁舎　柏原職員福利センター　１階会議室

３　**出 席 者**

委　員（五十音順）
　角野委員長、安達委員、構井委員、上甫木委員、岸委員、清水(夏)副委員長、清水(徳)委員、鈴木委員、瀧山委員、土性委員、中川委員、藤田委員、宮垣委員

専門アドバイザー
　光井委員

※欠席委員：足立委員、谷水委員、平櫛専門アドバイザー

事務局
　丹波県民局：今井県民局長、岡副局長兼県民交流室長、柳瀬県民交流室次長、西原班長、竹村
　本庁ビジョン課：吉住主幹

４　**内　　容**

（１）　開会
・角野委員長あいさつ

（２）　議事

①パブリック・コメントの実施報告

②丹波新地域ビジョン最終案

③シンボル・プロジェクトと関連組織

④「たんばユースチーム」の参加者募集について

⑤その他

（３）　閉会

５　議 事 録

（１）　開会

角野委員長
・今回が６回目の委員会で、新地域ビジョンが最終案ということでほぼ成案かと思っている。ここまでご意見いただいたものを修正、追加等と確認いただいて、まとめに入っていきたい。

（２）　議事

議題（１）パブリック・コメントの実施報告と（２）丹波新地域ビジョン最終案を併せて、事務局から説明

委員からのご意見
委員
・P26展開方向③の＜取組の方向性＞の●２個目、「日常生活の足」という言葉はこういった冊子で見たことがないが、問題はないのか。

委員
・「生活の足」と言うのは、白書などでも使われる通常の言葉であるが、「日常生活の足」というのはない。「生活の足」とされてはどうか。

委員
・たんばユース躍動プロジェクトの、丹波縄文の森塾アドバンスドコースは、背景に生物多様性の推進がある。ここでの出身者をアクティブ・フォレスト・プロジェクトで活躍して欲しいと思っているので、P41の「生きる力を学ぶ」の前に「森の恵みと」という記述を追記して欲しい。

委員
・まちの拠点創造プロジェクトに、丹波地域の中心市街地（柏原地区等）との記載があるが、これは、柏原だけの事業なのか。丹波地域全般を指すものなのか。

事務局
・人口集積地全体を想定しており、柏原だけを指すものではない。事業の優先性を考えたとき、都市マスタープランとの関連からも、取り組むべき地区の筆頭として柏原地区が挙がってくる。
・他の地区でもまちの再整備が必要だという議論があがってくれば、そこでの検討会も開いたらよいと考えている。

議題（３）シンボル・プロジェクトと関連組織、（４）「たんばユースチーム」の参加者募集について、事務局から説明

委員からのご意見

委員

・今までのビジョン委員会は、個人の資格で参加していた。今後、この新しいビジョンの中で意欲を持った人がどう活躍できるのかが見えない。個人が見えてこない。個人としてどういう形でどう参加できるのか、球出しが欲しい。

・たんばユース躍動プロジェクトの推進にあたって、高校生の負担とならないような仕組みづくりが必要。県民局と青少年本部、県教育委員会、市、市教育委員会からの依頼が重なる。例としていじめ、不登校の問題は様々なところでやっている。学びっこフェスタなども青少年本部や教育委員会が共催でしているが、その重なり具合を調整することが必要。高校生が減る中で、やらされることが増えている。その整理も必要。

事務局

・個人での参加もできるように考えている。ＯＢネットワークで意見をきく体制をつくろうと思っている。それも公募する。その他、感心のある人はプロジェクトチームで活動してほしい。

・高校生については、同じような主体が重なるので推進体制を調整する。運営指針も作る。

委員

・プラットフォームTAMBAという形で各プロジェクトを横串で差すことは、人的資源を有効に活用するという側面と、次の世代につなげていくという、たんばユースチームの育成の観点からも有効。固定的ではなく、シンボル・プロジェクトの他のチームとの人員交流も行ってほしい。

・学生も、ひとつのプロジェクトだけでなく、他のプロジェクトへも参加できるようにしてもらいたい。大学生の参加については、プロジェクトリーダーへの任命や、取組の表彰を受けるなど、履歴書に書けるようにすればメリットと感じ、応募も増えるのではないか。

委員

・ビジョン委員もシンボル・プロジェクトへ参加して欲しいと言われているところだが、公募にかけただけで反応する委員がどれだけいるか。

委員

・ユースチームの公募をするということだが、丹波市でも高校生を集める時の問題は、移動手段。そこが一番の敷居になっているので、場所の設定への配慮が必要。

委員

・高校生を集めるのが難しいという話があるが、オンラインなら移動もなく参加しやすくなる。プラットフォームTAMBAをどう設計するかによって、今後、うまくいくかどうかが左右される。プロジェクトの進捗管理はどこがやるのか、効果検

証も含めてどう考えるか、など、位置づけをはっきりしておく必要があると思う。シンボル・プロジェクト参加者同士、お互い知り合うことも大事。

委員
・推進体制の組織する順番はこれでよいと思う。プラットフォームの運営は、プロジェクトチームができてから考えればよい。

委員
・プロジェクトチームの公募は、発信方法が大事になると思う。

角野委員長
・プロジェクトチームの人集めは、プラットフォームの立場で集めることになると思う。

委員
・人口が減っていく中でも、しっかりやっていける組織づくりが大事。
・ユースチームは、１年間やったことを次の世代にどう引き継ぐかがポイント。未来のビジョンが見えて、地域に自分たちのが力が役立つという切り口をアピールすれば、若者は魅力を感じ、集まってくると思う。

委員
・若者の集め方は、主な活動をアピールして、シンボル・プロジェクトへの事業提案をクローズアップしてはどうか。募集の時に伝える工夫がいる。

委員
・たんばユースチームが、このビジョンの核の部分、大事な落ちの部分になると思う。募集から運営まで、そのままプロポーザルにかけて、然るべき主体に任せてしまってもよいのではないか。
・高校生については、探求の授業に載せられるように工夫すれば、人を集められると思う。

委員
・シンボル・プロジェクトに、できるだけ若い人の力を寄せてほしい。そうすれば、他の参加者にも新しい発想法やスキルを訓練する機会になる。これからの新しい時代に対応するため、若い世代に引き継ぐためには訓練が必要。

委員
・前回の委員会で資料についていた、シンボル・プロジェクトのマトリックス表が今回はついていないが、本体案から削除されるということか。

事務局
・今回は資料に付け忘れている。本体案に挟み込む予定。

委員
・たんばユース躍動プロジェクトは生物多様性の推進もあるので、展開の方向性の森・川・里のところで、関連事業としてほしい。

議題（５）その他　資料編と将来像のイメージ図について、事務局から説明
資料編
・p. 34～「丹波の森づくり30年を振り返る」が未完成だったため、追記。
・p. 42～「2050年を描く未来ストーリー」を、対話式に書き換え。

将来像のイメージ図
・参考資料「県民だよりひょうご」に、空飛ぶクルマ、人型ロボット、パワースーツの３つのイラストが描かれている。こういったイメージのものを、将来像のイメージとして描いていく。３月20日頃の完成を目指している。

（３）　閉会
角野委員長
・長期間にわたり、熱心にご議論いただき感謝申し上げる。この成果を是非、シンボル・プロジェクトやユースチーム、プラットフォームをつくり、つないでいき、そして若い世代にバトンタッチできればよいと考えている。

今井局長
・２年間にわたり、新地域ビジョンの策定作業に携わっていただき、ご尽力いただいたことに感謝申し上げる。
・計画の世界では「計画は作った日から陳腐化する」とよく言われる。我々は成長し続けるビジョンということを掲げているので、ビジョンの中に新しい要素をどんどん付加していきたい。委員の皆様には、引き続き何らかの形で携わっていただきたい。
・推進体制のところで、「共創の風土・文化づくり」という項目を加えている。推進体制をつくるだけでうまくいくかというと、やはりそうではない。より大きな動きをつくっていく意味で、風土や文化から変えていくということを考えなければならない。20年前のビジョンをつくったときの熱量を、どう蘇らせたらよいのか、新ビジョンを推進する中で考えていきたい。
・これまでの推進体制を見える化、オープン化し、オープンイノベーションの仕組みへと変えていく努力が必要。その取組に、全力をあげたいと思っている。
・ユースチームは、若者だけのものではない。若者を巻き込むことで、周りの大人も巻き込んで、地域全体も巻き込んでいく。ユースチームを核に、地域の担い手をどんどん拡大していきたい。
・地域ビジョン委員会というシステム自体はいったんピリオドとなるが、皆さまからご意見やご提案を頂く仕組みは、来年度以降新たに整えていきたい。